

【報告】DHUでの2年目のブレンディッド・ラーニング — Web系演習授業での事例報告 —

Report on Blended Learning Techniques at DHU in the Second Year
— A Case Study from Website Practice Courses —

栗谷 幸助
Kousuke Kuriya

デジタルハリウッド大学
准教授

1. はじめに

本稿の目的は、デジタルハリウッド大学(以下、DHU) デジタルコミュニケーション学部デジタルコンテンツ学科でのWeb系演習授業において2014年で2年目を迎えたブレンディッド・ラーニングを活用した授業運営について、過去3年間の比較をもとに同教育手法が学部教育にもたらす効果を実証しようとするものである。

2014年度の結論としては、2013年度の成果である「成績優秀層の増加」「ドロップアウト率の低下」「最終課題提出率の増加」の3点がさらに進んだことを挙げることが出来る。

次節では、DHUで言う「ブレンディッド・ラーニング」について簡単に整理する。

2. DHUのブレンディッド・ラーニングについて

授業運営の一部に「映像教材による基本知識の自学」を取り入れた学習形態を「ブレンディッド・ラーニング(英語: blended learning)」と呼ぶ。そして、映像教材による自学をクラス授業外の予習で活用する場合を特に「反転学習」とするが、ブレンディッド・ラーニングには「映像教材による基本知識の自学」と「教員のレクチャー型授業やグループワークによる応用学習」を1つのクラス授業の中で行なう形もあり、反転授業と区別をするためにそのような授業形態を指して「ブレンディッド・ラーニング」と呼ぶことを示しておきたい。本稿では、後者の授業形態をDHUのブレンディッド・ラーニングとする。

3. 大学教育におけるブレンディッド・ラーニングの効果検証

前節ではDHUにおけるブレンディッド・ラーニングを定義したが、本稿の主題は大学教育におけるブレンディッド・ラーニングの有用性を検証することである。ここでDHUにおいてブレンディッド・ラーニングを導入した経緯を簡単に示しておきたい。

DHUの母体であるデジタルハリウッド株式会社では2000年代半ばよりデジタル・クリエイティブ教育の映像教材を有しており、社会人向け専門学校では教育現場での課題を解決するために、同映像教材を使用してきた。

DHUにおいても当初は動画教材を活用した「反転学習」での授業運営を計画するが、「一学部一学科の大学であることでの十分な自学学習の時間を確保することが難しい点」「学生の学習モチベーションの格差が大きい点」が反転学習を行なうことへの懸念点となった。

そこでDHUでは、1つのクラス授業の中で「映像教材による基本知識の自学」と「教員のレクチャー型授業やグループワークによる応用学習」を行なうブレンディッド・ラーニングを導入することとし、これにより「ドロップアウト学生の減少と成績の底上げ」「学生の学習進度と深度の推進」「学生への個別フォローと応用指導への注力」を目指した。

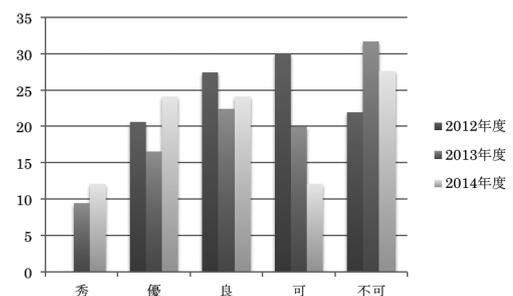
実施授業は、Webサイトを構築する上で必要となるHTMLやCSSのスキルを学習する演習授業である「Webサイト構築演習」の筆者が担当するクラスとし、2コマ(180分)の授業時間の約半分を学生の自学による映像学習、残りの半分の授業時間を教員によるレクチャー型授業の応用学習として実施した。

以下に、過去3年間のクラスを比較することで効果検証を行なう。2012年度・3クラス(レクチャー型授業)全体履修者数73名、2013年度・3クラス(ブレンディッド・ラーニング)全体履修者数85名、2014年度・2クラス(ブレンディッド・ラーニング)全体履修者数58名であることを示しておく。

3-1. 過去3年間のクラスの成績分布の比較

2012年度、2013年度および2014年度の成績分布図を見定める。

表1 2012年度～2014年度 成績分布図



(単位: % クラスに対する当該成績者の割合)

| | 秀 | 優 | 良 | 可 | 不可 |
|--------|------|------|------|------|------|
| 2012年度 | 0 | 20.6 | 27.4 | 30.1 | 21.9 |
| 2013年度 | 9.4 | 16.5 | 22.3 | 20 | 31.8 |
| 2014年度 | 12.1 | 24.1 | 24.1 | 12.1 | 27.6 |

表を比較すると、単位修得の成績評価である「秀」「優」「良」「可」の成績が全体的に高評価側に持ち上がっている傾向が見られる。「秀」評価については2012年度の「0%(0名)」から2013年度の「9.4%(8名)」、2014年度「12.1%(7名)」と、上位層を伸ばす効果が見られた。また2014年度では「優」「良」評価が伸び「可」評価が減っていることから、

単位修得者の成績の底上げが行なわれていることがわかる。

一方、「不可」評価については修了者数／率に繋がるので、次表で見ていきたい。

表2 2012年度、2013年度および2014年度の成績評価「不可」の割合

| | 2012年度 | 2013年度 | 2014年度 |
|-----------|--------|--------|--------|
| 履修者数(名) | 73 | 85 | 58 |
| 単位修得者数(名) | 57 | 58 | 42 |
| 修了率(%) | 78.1 | 68.2 | 72.4 |

【修了率の比較】

2012年度・修了率「78.1%」

2013年度・修了率「68.2%」

2014年度・修了率「72.4%」

2012年度と2013年度を比較すると、修了率の低下(「不可」評価の増加)が見られた。これは授業内容の理解以外の要因(最終課題提出締切日の間違いなど)による最終課題の未提出による「不可」評価の割合が極端に高い1クラスがあったために起きた事象であった。2014年度については修了率の改善が見られたが、大幅な改善とはならなかった。これは、日本語の理解力が低い留学生が一定数存在するため、映像教材の効果が表れ難いためである。この点については、留学生の日本語科目とのカリキュラム的な連携も必要になるとと思われる。

成績評価は、「授業態度(出席状況および授業アンケートの提出を含む)」「授業内演習評価」「最終課題評価」の3つにより行なわれるため、これらについても検証する。

【最終課題提出率の比較】

2012年度・最終課題提出率「73.9%」

2013年度・最終課題提出率「76.4%」

2014年度・最終課題提出率「82.6%」

最終課題の提出率については、年々増加をしていることが分かる。続けて、出席率についても見てみる。

【出席率の比較】

2012年度・出席率「79.0%」

2013年度・出席率「78.0%」

2014年度・出席率「89.2%」

出席率については2014年度に大きな改善が見られた。当初は映像学習パートについては「いつでも学習出来る」ことから出席率低下も想定していたが、質問対応やレクチャー型授業による応用学習パートの意味を伝えることで2013年度については2012年度とほぼ同等を維持し、さらに2013年度の質問対応から授業進行や教材などを改善することで応用パートの意味が高まり、2014年度では大きく改善することが出来た。

さらに、最後まで授業を受けているか否か=ドロップアウト率を見てみた。

【ドロップアウト率の比較】

2012年度・ドロップアウト率「13.6%」

2013年度・ドロップアウト率「10.5%」

2014年度・ドロップアウト率「6.9%」

モチベーションを保ち、最後まで授業を受け続けてもらうことについては、ブレンディッド・ラーニングによる効果が大きく出ていることが確認出来る。ブレンディッド・ラーニングの導入以前は、学習についていけない学生が早期離脱をしていたが、映像教材により欠席をした学生が授業復帰出来るようになったため、前述の授業進行や教材の改善と相まって2014年度はドロップアウト率の大きな改善を実現することが出来た。

3-2. 成績下位層学生の減少と成績上位層学生の増加について

定性評価として、成績下位層学生の減少と成績上位層学生の増加について見ていきたい。

演習授業については、教員および2~3名のTA(ティーチング・アシスタント)により授業運営を行なっているが、映像教材を使用した学習では教員およびTAの学生への個別指導の時間が取りやすいため、手厚い質問対応や学習指導を行なうことが出来、理解が充分でない学生へのフォローにより成績評価にもボトムアップ傾向が見られた。

また、学習理解の早い学生や学習経験のある学生については自学による映像学習の時間を使って個別課題を課し、学生個人が取り組む関連学習への指導を行なった。そのようなステージに進む学生が2013年度はクラス当たり3~4名だったが、2014年度はクラス当たり5~6名になり、それがそのまま成績評価「秀」「優」に繋がった。

4. まとめ

これまでに、DHUでの動画教材の活用事例について検証しながら、大学教育でのブレンディッド・ラーニングの有用性を示してきた。

2014年度の成果としては、2013年度に効果が見られた「成績優秀層の増加」「ドロップアウト率の低下」「最終課題提出率の増加」の3点をさらに推し進めることが出来た。2015年度については、これらをさらに進化させていくことが求められる。

2015年度よりDHUはクォーター制を導入する。前後期(各15週)から四学期(各8週)への変更により細かな科目設定を行なうことが出来るため、映像教材を使用した「反転学習」「ブレンディッド・ラーニング」をWeb系以外の演習授業へと広げていく。また、一部映像教材については多言語化を行なうことで留学生の学習フォローも推し進める。

ブレンディッド・ラーニングにおいては、教員が「授業講師」「質問対応」「学習相談」「グループ学習でのファシリテーター」といったさまざまな役割を担うことが出来る場所に大きなメリットがある。それぞれの役割の精度を高める作業を続けていくことには大きな意味があり、それらを受けて学生は大きな研究成果を出してくれることであろう。